
未婚の熟年夫婦

L e n

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未婚の熟年夫婦

【Nコード】

N89920

【作者名】

Len

【あらすじ】

ハヤテのごとく！の二次創作。

薫×雪路の皮をかぶった雪路×ヒナだぞ！ みんな騙されるな！

私の姉はもう三十歳も間近だというのに遊んでばかりで、自堕落で、だらしなくて、酒乱で……とにかく悪いところを挙げたらきりが無い人なだけけれど、家族思いだったり、逆境でもめげないで絶対に諦めたりしない、そういった面もある、自慢はできないけど私の中ではいつでも誇りに思っている姉だ。だけれど、そういった良い面を見る前にだらしない面を見せてしまう所為か、そろそろ婚期が迫っているにも関わらずお嫁の貰い手が無い。いや、私自身はもう貰い手は一つしかないと考えているのだけれど、中々本人たちが気付いてくれない。

そんな二人を、今日は出来る限り観察し、今後私が二人の手助けをする時の参考にしようと思う。余計なお世話かもしれない。でもこれは、最愛の姉を憂う妹のお節介として受け止めて欲しい。こんな身勝手な考えを胸に、私は一日を開始した。

朝一番に私が洗面所で洗顔した後、まずすることは姉のいる離れに行くことだった。姉が自分で起きることなんて皆無なので、いつも私が義母が起こしに行っている。本当はこんなこと本人の為にしないから止めるべきなのだけれど、教職員が遅刻なんてした日には、名門の名において解雇されるだろうから仕方なく続けている習慣だ。

離れに入ると、嗅ぎ慣れたアルコール臭が鼻につく。しかし、今日は普段よりその匂いは薄れている。それだけではなく、いつもなら床中に転がって踏み場を無くしている酒瓶も、部屋の隅に整然と並んでいた。

「これは……」

申し訳なさとお甲斐無さから、私は嘆息した。もちろん、これは姉本人がしたことではない。おそらく――

「あら。ヒナちゃん、おはよう。ヒナちゃんも雪ちゃんを起こしに来たのね」

「あ、お義母さん。おはよう」

そこまで考えたところで、後ろから義母に声を掛けられた。挨拶を交わした後、困ったような顔をして義母は言った。

「夜中、離れで物音がしたから雪ちゃんが帰ってきたんだと思って来てみたら、薫くんが掃除しててね」

「ああ、やっぱり。また薫先生にご迷惑かけて、お姉ちゃんは……」

布団でいまだ夢の中にいる我が姉を睨む。酒乱の姉に文句も言わず飲みにつき合ってくれる人が薫先生で、その人はこうやって酔い潰れた姉を送りに来てくれる。それどころか最近は掃除などもしてくれて、感謝してもしきれない人だ。いつもお札を言いに行っても、「オレが好きでやってることだから」と苦笑いで流してくれる。

「本当、薫くんにもいつも申し訳ないわ。雪ちゃんも、自分がどんなに愛されてるかを自覚した方が良いわねえ」

「自分がどれだけ愚かなのかもね。お姉ちゃん！早く起きなさいっ！」

「うひゃあっ!？」

怒声と共に布団を引き剥がすと、姉はバネのように跳ね起きた。それを見て、私と義母を大きく溜息をついた。



私が身支度を終えた頃、姉の方はというと、たいていが二日酔いの頭を抱えながら朝食をとっている。それを急かして歯を磨かせ、引きずるように家を出る。やや早歩きで最寄駅へ急ぐ。

「お姉ちゃん、昨日も遅くまで飲んでたでしょ。いつもいつも薫先生に迷惑かけて」

「ああ、頭に響くから今は勘弁して……」

「そんなの知らないわよ！　だいたいおかしいと思わないの？　酔い潰れた自分を家まで送ってくれて、あまつさえ部屋の掃除までしてもらってるのよ！」

「あ、ちょ、ヒナやばい。それやばいですヒナさん」

身勝手な文句を言う姉の肩を掴んで前後に揺すりながら、自分がどれだけ幸せなのかを論じたけれど、私の言葉をどれだけ姉が理解したかは絶望的だった。

通学中（通勤中）も私は姉を諭し続け、白鳳に着く頃にはごめんなさいしか言わなくなった姉を保健室まで運んだ。そこで頭痛薬と胃薬を貰い、職員室に置いていく。そこで薫先生に会った。

「お、おはよう桂。その、なんだ。いつも大変だな」

「おはよう御座います、薫先生。それはこちらの台詞です。昨日もお姉ちゃんを送ってもらったどころか、部屋の片付けまでしてもらって。本当に申し訳ありません」

「いいんだよ。店に置いていくのもなんだし、片付けはついでだ」
いつもの苦笑いと共に、後ろで壁にもたれて唸ってる姉を眺めて嘆息する薫先生。

「ま、取り敢えずアレはこっちで預かる。桂は教室に行ってくれ」

「は、はい。有り難う御座います」

「いって。おい雪路、いつまでもへばってんじゃねえ。ホームルーム始まるぞ」

薫先生がついに廊下でうつぶせに寝始めた姉を引きずって、職員室の中へ運んでいった。その後ろ姿に「失礼します」と言って、薫先生への罪悪感でいっぱいな心境を抱えながら、教室へと向かった。



H Rも適当に済まし慌ててトイレに駆け込む自分の姉に呆れつつ、一限目の用意をしていたところに、後ろから友人たちを会話が聞こえた。

「今日も桂ちゃんぐだぐだだったねえ。いつまで飲んでたんだろ」

「そういえば昨日の夜、ヒナの家に向かっていく雪路を背負った薫先生を見たわ」

「うーむ、薫先生も大変だな。普通ならば、そんなことはしてられないだろう」

「したとしても、下心とかそういうものがないとやっていけないでしょうね」

「それすらしてないということは……不能か？」

「ほええ。薫先生かわいそう……」

「泉……ま、まあ冗談だが。それは置いといて、何故美希が昨日ヒナの家に向かっていく二人を見たんだ？」

「それは、まあ、うん。偶然ね」

……そんな会話が聞こえた。色々と追及したいところではあるが、取り敢えずそれは忘れるとして、彼女たちは今聞き捨てならないことを言った気がする。

下心だ。もちろん私は薫先生がそんな人ではないと分かっているけれど、確かに酔い潰れた女性を家まで送っていく行為を、まったくの親切心で行える男性は多くないんじゃないだろうか。男性が酔った女性を部屋まで運ぶすることは、え、えと、なんていうか、少なくとも掃除ではないだろうと私でも分かる。姉の貞操は正に、薫先生の自制心に懸かっているということだ。姉は学生時代を親の借金返済に費やしていた人だから、そ、そういうことに縁なんて無いはず。そしてあんな性格だから、男の人も寄ってこなかったはず。

薫先生を除いては。

最早、姉の選択肢は一つしか無いように思える。恩人に対して、が、我慢させてはいけないんじゃないだろうか。その、もちろんできちゃった結婚なんてふしだらなことは言語道断だけれど、薫先生くらい節度のある男性ならある程度は——って、な、何考えてるんだろ、私……。

余計な思考を振り払うと、友人が何故昨夜の私の家の付近の動向を知っているのか追及しようと立ち上がった。



昼休み、昼食をいつものように友人と済まして、そのままテラスで談笑していると、偶然にも姉が薫先生といるのを見つけた。一緒に学食で食事をしているところだが、私の勘だとあれは姉が薫先生にたかってるようだ。ていうかお姉ちゃん、あんなひどい二日酔いだったのによくカレーなんて食べれるわね……我が姉ながら、強靱な胃をしてるわ。

そんなことを考えながらだったからか、自分でも気付かないほど凝視していたのを友人に指摘されてしまった。

「ヒナちゃん、さっきから何見てるの？」

「あれは、雪路と薫先生か。はっはー、一緒に食事とは仲が良いことだな」

「まあ、私たちが期待するような甘酸っぱいことは何一つ起きないんでしょけど」

「桂ちゃんだしねえ」

「雪路だしな」

「雪路だものね」

三人が口を揃えて言うことに否定はしないが、教え子にもこんな風に断言されてしまう薫先生には同情を禁じ得なかった。押しの弱い薫先生にも原因はあるが、やはり問題は姉の方にあるのは明白だった。あんな人間に押しも何もないだろう。

うーん、でも。

こう、遠目で見て気が付いたのだけれど。いつもちよっかいをかけているのは、お姉ちゃんの方なのよねえ。

それはまるで、気になる子にいじわるしちゃう男の子のような。そんな印象を受けた。これじゃまるで、相思相愛じゃない。いやでも、どうなんだろう。お姉ちゃんが何かしらちよっかいをかけるのは、薫先生にだけじゃないのよね。私にだって一部の生徒にだってやってることだし。

ますます混乱する姉の言動に困惑した私は、無意識に嘆息と共に呟きを零した。

「はあ。うまくいかないものね」

「ん？ 何が？」

「バストアップ体操がか？」

「ほええー。ヒナちゃんも大変だねえー」

「貧乳はむしろステータスっていうことを、ヒナは学んだ方が良かったわよ」

「……………」

好き勝手言ってくれる友人たちを睨むが、ここはたくさん生徒の目があるから怒号を上げるわけはいかない。努めて笑顔を絶やさないようにするが、上手く出来ている自信は正直無かった。唇の端がひくひくと痙攣しているのが分かる。そんな私の笑みを見た友人たちは、気まずそうに目を逸らすのだった。



放課後、生徒会の用事で職員室に足を運んだ。書類を提出して生徒会室に戻ろうとしたところで、珍しく（こんな表現の仕方になっ
てしまうのが我が姉ながらとてもどうしようもないのだが）真面目
に職務を全うしている姉が視界に入った。私には気付いていない様
子で、何かの資料を作成しているところのようだ。

そのまま何気なしにその様子を眺めていると、姉が何やら思い出
したような素振りを見せたかと思うと、後ろの席で同じように職務
をしていた薫先生に話し掛けた。

「ねえ、そういえば。アレどうなった？」

「ああ、前回の職員会議で出たやつだろ。それなら次回に持ち越し
だよ」

「なーんだ、そうなの」

「それよりお前、例の件だけど」

「ん？ あーはいはい、前言ってたやつね。それならもうまとめ
あるわ、後で渡す」

「おお、悪いな」

「別に良いわ。でも、これでこないだ授業で使う資料手伝ってもら
った借りは返したわよ」

「分かってるって」

「ならいいのよ。でもアレね、私が思ってたのとちょっと違ってて
――」

「え、マジかよ。どれどれ――」

「阿吽の呼吸……」
「っていうか。」

もうさっさとくっ付きゃいなさいよ、あなたたち。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8992o/>

未婚の熟年夫婦

2010年11月14日05時29分発行